

大学生が紙面づくりに挑戦しました!

大学生協発 就業体験 2018 3.19 in 読売新聞

首都圏の大学生たちが3月19日、大学生協が読売新聞東京本社と協力して実施した就業体験プログラムに参加しました。学生たちはインタビューや写真撮影などに挑戦し、この紙面をつくりました。参加者からは「新聞を幅広く学べた」「収穫が多かった」などの感想が出ました。(敬称略、順不同)



インタビューは交代で質問。緊張した～

体験した1日の流れ

- 10:00 参加者の自己紹介、新聞についてミニ解説
- 10:30 編集局見学。タブレット端末を使って模擬取材
- 12:10 インタビューに備えて写真撮影実習
- 12:50 社員食堂でランチを取りながら社員と懇談
- 13:40 グループで質問を考えた上でインタビュー取材
- 14:40 記事を作成。書いた原稿に社員が助言
- 16:00 新聞社の事業、広告についてレクチャー
- 17:00 総括質問など
- 17:45 閉会

「就活に生かしたい」

澄田謙人 法政大2年

見学した編集局は柱のない吹き抜け構造で、想像とは全く違った。質問を考えるのは大変だったが、インタビューが楽しくて、ついついメモを取り忘れてしまった。記者になった時には気をつけようと思った。

谷川円香 早稲田大4年

模擬取材はゲーム感覚で楽しめた。写真撮影やインタビューに積極的に挑戦し、社員からもらったアドバイスも参考になった。気軽に参加したが、学んだことを就活などに生かしたい。

渡辺武瑠 横浜国立大3年

インタビュー中に写真撮影を担当した。石浜さんは家庭のことを語る時は柔らかい表情を見せたが、仕事の話になると凍りついた表情になった。写真は時に言葉以上に「語る」ものであると実感した。

須永彩花 慶応大3年

インタビューで質問ができ、自分が書いたものを講評してもらえたのが良かった。会社案内の映像を視聴したり、レクチャーを聞いたりして、新聞社の仕事を具体的に知ることができた。

山本美奈子 慶応大2年

和やかな雰囲気の中で安心して取り組めた。レクチャーでは、私が今まで見てきた展覧会の中に、読売新聞社が企画したものがあることを知り興奮した。新聞社に事業局という部署があることも初めて知った。



書いた原稿に社員(手前左から2人目)からアドバイスをもらう

高橋李佳 法政大2年

普段読んでいる新聞の制作過程を体験しながら学べた。今後新聞を読む時は書き手が意識していることも考えたい。エレベーターで乗り合わせた社員らの姿を見て、新聞社の日常をのぞくこともできた。

櫛部紗永 早稲田大3年

SNSがこれだけ普及する社会で、新聞の影響力はどれくらいなのか、正直分からない。しかし、今回の体験を通して新聞に携わる人々の熱意を知り、新聞の存在意義の大きさを感じた。

笹野桃愛 津田塾大2年

体験を通して、記者の大変さや楽しさを感じることができた。社員の方々とごはんを食べたり、話したりすることで、新聞をより身近なものに感じた。家に帰ったらすぐに新聞を読みたいと思った。

石井祐里枝 日本女子大3年

新聞社は忙しい、大変というイメージだったが、社員の顔は生き生きとしていて、この仕事が好きなんだ、という心意気を感じた。私も自分の仕事に誇りを持てる大人になりたい。

読売新聞記者 石浜 友理さん

いしはま・ゆり 1981年、茨城県生まれ。大学ではフランス文学を専攻。2003年に入社し、横浜支局などを経て09年社会部へ。警視庁、ロンドン五輪、皇室、裁判所などを担当し、現在は調査報道に携わる「遊軍記者」として活躍中。



谷川円香撮影

社会部
部員約120人。警察、司法、皇室、東京都政のほか厚労、環境、防衛、運輸など守備範囲は広い。読売KODOMO新聞、読売中高生新聞の編集も担う。

「文章を書くことが好きだったこと、それに、女性でもバリバリ働けそうなのという。」

記者を志したのは、大学3年で就職活動を始めた頃のこと。自然と記者への関心が湧いたと振り返る。

「事件被害者への賠償金支払いを命じる判決が出たことを受けて、担当弁護士に『よかったですね』と声をかけたところ、思いがけない言葉が返ってきた。『お金が支払われると思っ

たと思う』。そこに記者の「市民感覚で、おかしい、と思ったことを記事にする。そのことで、社会がちょっと良くなる方向に動き出した時、書いて良かったと思う。」

取材を重ね、記事を書き続けるうちに、不払い問題で苦しむ被害者救済に向けた制度改正が動き出した。一人の市民として「おかしい」と思ったことを大切にしてきた。

「取材で心がけていることは、相手が話しやすい雰囲気をつくること。核心を突く質問を真つ向からぶついても簡単には答えてくれない。話してもいいと思わせることが大切」と話す。

真を撮りに行ったら、カメラが壊れていてまともな写真が撮れなかった。「泣いたりもしましたが、落ち込むのはもうやめました。次から次へと仕事をこなさねばならないので」と笑う。

社会部記者となってもなく9年。「予想通り大変な職場」で、2人暮らしの夫と一緒に食事をするのもまだだが、「インターネッ」で誰かが情報を入手できる時代になっても、本当に重要な情報は隠される。掘り当て、発信していきたい」と力を込める。

「文章を書くことが好きだったこと、それに、女性でもバリバリ働けそうなのという。」

記者を志したのは、大学3年で就職活動を始めた頃のこと。自然と記者への関心が湧いたと振り返る。

「事件被害者への賠償金支払いを命じる判決が出たことを受けて、担当弁護士に『よかったですね』と声をかけたところ、思いがけない言葉が返ってきた。『お金が支払われると思っ

たと思う』。そこに記者の「市民感覚で、おかしい、と思ったことを記事にする。そのことで、社会がちょっと良くなる方向に動き出した時、書いて良かったと思う。」

取材を重ね、記事を書き続けるうちに、不払い問題で苦しむ被害者救済に向けた制度改正が動き出した。一人の市民として「おかしい」と思ったことを大切にしてきた。

「取材で心がけていることは、相手が話しやすい雰囲気をつくること。核心を突く質問を真つ向からぶついても簡単には答えてくれない。話してもいいと思わせることが大切」と話す。

真を撮りに行ったら、カメラが壊れていてまともな写真が撮れなかった。「泣いたりもしましたが、落ち込むのはもうやめました。次から次へと仕事をこなさねばならないので」と笑う。

社会部記者となってもなく9年。「予想通り大変な職場」で、2人暮らしの夫と一緒に食事をするのもまだだが、「インターネッ」で誰かが情報を入手できる時代になっても、本当に重要な情報は隠される。掘り当て、発信していきたい」と力を込める。

市民感覚を大切に

新聞をはじめ報道の現場で活躍する女性が増えている。入社16年目の中堅記者として読売新聞東京本社社会部で働く石浜友理さんに、記者の仕事ややりがいなどを聞いた。

「裁判などで確定した事件被害者への賠償金や離婚後の養育費などの不払い問題だ。きつかけは、ある裁判。事件被害者への賠償金支払いを命じる判決が出たことを受けて、担当弁護士に『よかったですね』と声をかけたところ、思いがけない言葉が返ってきた。『お金が支払われると思っ

たと思う』。そこに記者の「市民感覚で、おかしい、と思ったことを記事にする。そのことで、社会がちょっと良くなる方向に動き出した時、書いて良かったと思う。」

取材を重ね、記事を書き続けるうちに、不払い問題で苦しむ被害者救済に向けた制度改正が動き出した。一人の市民として「おかしい」と思ったことを大切にしてきた。

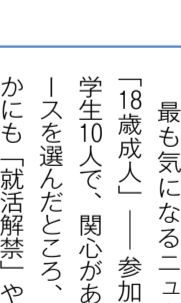
「取材で心がけていることは、相手が話しやすい雰囲気をつくること。核心を突く質問を真つ向からぶついても簡単には答えてくれない。話してもいいと思わせることが大切」と話す。

真を撮りに行ったら、カメラが壊れていてまともな写真が撮れなかった。「泣いたりもしましたが、落ち込むのはもうやめました。次から次へと仕事をこなさねばならないので」と笑う。

社会部記者となってもなく9年。「予想通り大変な職場」で、2人暮らしの夫と一緒に食事をするのもまだだが、「インターネッ」で誰かが情報を入手できる時代になっても、本当に重要な情報は隠される。掘り当て、発信していきたい」と力を込める。

取材の基本を再認識

インタビューを受けて
取材される側に立ったのは初めての経験でした。「素直に、丁寧に」という気持ちで、精いっぱいお答えしました。相手からうまく話を引き出すためには、聞き手の熱意や誠意が欠かせません。熱心に質問する学生の皆さんの姿に、取材の基本を改めて認識させてもらいました。



渡辺武瑠撮影

私たちの気になる! ニュース

順位	項目	スコア
1	18歳成人の民法改正案を閣議決定	69
2	東日本大震災から7年	59
3	森友文書書き換え	48
4	来春卒大学生の就職活動解禁	47
5	2017年の児童虐待、初の6万人超	45
6	米大統領、北朝鮮と首脳会談の意向表明	41
7	平昌パラリンピックで日本選手活躍	29
8	2017年のストーカー被害過去最多	28
9	自民党で改憲案づくり進む 藤井六段、年間60勝を達成	22

全員気になった「18歳成人」

最も気になるニュースは「18歳成人」——参加した大学生10人で、関心があるニュースを選んだところ、そのほかにも「就活解禁」や「児童虐待」「ストーカー被害」など、若者に身近なニュースが上位に入った。

3月18日に報道されたニュース24本から、各自関心がある10本を選び、気になる順に10点から1点刻みでスコアをつけた。1位の「18歳成人の民法改正案を閣議決定」は、全員から得点を集め69点。「歴史的な出来事だ」「20歳を超えても子どものような関心も高かった。

人もいる。成人とは何か? などの意見があった。

2位は「東日本大震災から7年」の59点。「当時小学6年生だったが、世の中に『当たり前』はないと感じた」など、今も強烈な印象が残る一方、「昨年夏に福島県を見てきた」など、被災地と向き合う姿勢も浮かび上がった。

また、「森友文書書き換え」や「米大統領、北朝鮮と首脳会談の意向表明」「自民党で改憲案づくり進む」など、国内外の政治への関心も高かった。